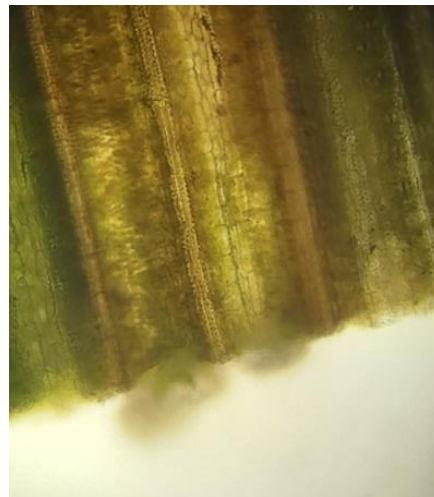


## イネの育苗期の細菌病

### 1. 褐条病

苗の地際葉鞘から葉身にかけて、褐色～黒褐色の条斑を生じます（左図）。検鏡すると、褐変した葉脈から菌泥が流出するのが観察されます（右図）。



### 2. 苗立枯細菌病

初期症状では、地際や根が褐変し、葉身基部が白変します（左図：左端苗は健全）。苗は腐敗せず萎凋枯死し、心葉は抜けやすくなりません（右図）。

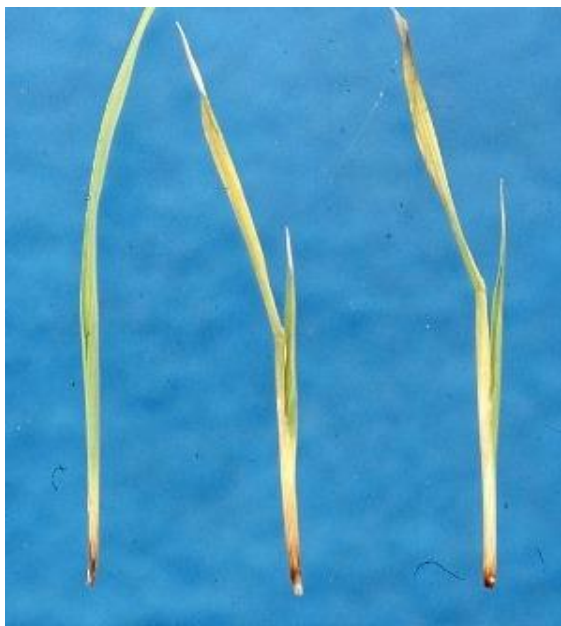


灌水に伴い、苗箱の長辺方向に拡大する傾向があります。

### 3. もみ枯細菌病（苗腐敗症）

苗が褐色に腐敗し枯死します。心葉は容易に引き抜くことができ、その基部は褐変しています（左図）。褐変した心葉基部を検鏡すると、大量の病原細菌が増殖しています（右図）。

坪状、パッチ状に発生する傾向があります（下図）。



### 4. 防除対策

いずれも種子伝染性なので、種子消毒を確実に実施することが重要です。近年良く見られる失敗事例は、籾袋に種籾を詰め過ぎていることです。水和剤、フロアブル剤、乳剤などは、液中に有効成分が溶け込んでいるわけではなく「懸濁」しています。このため籾が固く詰まっていると籾袋の内部まで成分が付着しません。また「懸濁」しているが故に、消毒液を繰り返し使用すると、懸濁した成分が種籾に付着していき、液中の農薬成分は減少していきます。籾袋の中でも種籾が泳ぐようにゆったりと入れて、消毒液の反復使用は避けるようにしてください。

育苗期の高温多湿は発病を助長します。今後、高温傾向が予想されていますので、育苗ハウス内の温度湿度管理に注意して下さい。